

カーソン・マッカラーズ『心は孤独な狩人』に
おける「孤独」と「障害」の結びつき

関慎太郎 (1T210499-8)

目次

1. 彼らの「孤独」とは何なのか
 - 1.1 作品の概要
 - 1.2 作品全体に通底する孤独
 - 1.2.1 Mute とは誰のことを指すのか？
 - 1.2.2 シンガーを取り巻く Mute たち ～ミック～
 - 1.2.3 シンガーを取り巻く Mute たち ～コーブランド医師～
 - 1.2.4 シンガーを取り巻く Mute たち ～ジェイク・ブラント～
 - 1.2.5 「孤独」が生み出すシンガーへの依存
 - 1.3 Mute を生み出した作品舞台
 - 1.4 彼らの「孤独」とは何なのか

2. 「ろう者であること」と「孤独」
 - 2.1 シンガーに対する町の人々の依存
 - 2.1.1 シンガーとアンテナプーロス
 - 2.1.2 話す「言語」を失ったシンガー
 - 2.1.3 一方的に語りかけることの暴力性
 - 2.2 ろう者としてのシンガーの孤独
 - 2.2.1 手話を巡る論争
 - 2.2.2 手話に対する同化政策と差別
 - 2.2.3 ポケットに手を入れるシンガーの心理
 - 2.3 アンテナプーロスに対するシンガーの依存
 - 2.4 シンガーの自殺を引き起こした社会的な抑圧

- 3 カーソン・マッカラーズはなぜ障害者を登場させたのか
ーレズビアンとしての彼女の当事者性と登場人物との結びつきー
 - 3.1 マッカラーズ作品における障害者表象

- 3.1.1 障害者に対する象徴化
- 3.1.2 精神的な不自由さ
- 3.2 マッカーズの人生と精神的に孤独な登場人物たち
- 3.3 シンガーとカーソンの結びつき

おわりに

参考文献

はじめに

1940年にジョージア出身の女性作家カーソン・マッカラーズが発表した『心は孤独な狩人（原題:The heart is a lonely hunter）』は南部の孤独な人間たちを繊細に描いた物語性と、その作品が弱冠22歳の女性によって書かれたという事実によって、驚きと共に多くの読者に読まれることとなった。この作品に登場する人物は「孤独」を抱えており、自分を理解してくれる人間を探して彷徨っている。さらに特徴的なのが、作品に登場する「孤独」な人物は、身体的もしくは精神的に何らかの障害を抱えているか、社会からマイノリティとしての扱いを受けていることが多い点である。

かねてより、障害と文学の結びつきに関心があった筆者としては彼らの「孤独」と「障害」は深く結びついているように感じられた。彼らが孤独を感じるのは、個人の心理の問題だけではなく、社会によって生み出された障害（＝ディスアビリティ）にもその原因があるのではないかという仮説を、本稿を進める上での前提としていきたい。「障害の社会モデル」の枠組みを文学批評に持ち込むことは、登場人物と同じ境遇にある現実世界を生きる人々に目を向けることを意味するのではないだろうか。単なる作品分析に留まらず、現実の社会にまで目を向け、テキストをより広い視野で分析することが、「ディスアビリティと現代」のゼミで文学批評の論文を書く意義だと筆者は考えている。

第一章では作品の概要に触れつつ、『心は孤独な狩人』の登場人物たちの「孤独」とは何なのかを考察していく。マッカラーズ作品における「孤独」な人物に特徴的なのが、自分の考えを他人に伝えることが出来ないという点である。本章ではミック、コーブランド医師、ジェイクの3人の取り巻く環境を取り上げ、彼らの孤独の原因を分析していきたい。

第二章では「障害の社会モデル」の概念を分析に用いて、作中の中心人物である聴覚障害者シンガーの孤独を、当時のアメリカ社会に引き寄せて分析をしていく。彼が「自分の事を語る事が出来ない」のは、当時のアメリカ社会における英語以外の言語に対する排外的な政策によって、彼が「自分の事を語るための言語を失ってしまった」という仮説を検証していきたい。

第三章では本作品の作者であるカーソン・マッカラーズに注目する。彼女のレズビアンとしての当事者性は、精神的な「孤独」を抱える作中の障害者たちを描く上でどのような影響を及ぼしたのかを本章では考えていきたい。

1. 彼らの「孤独」とは何なのか

本章ではカーソン・マッカラーズ『心は孤独な狩人』の概要に触れつつ、彼女の作品のキーワードである「孤独」を手掛かりに、作品全体の構造を分析する。

1.1 作品の概要

1940年、22歳のカーソン・マッカラーズは『心は孤独な狩人』（原題：*The Heart Is a Lonely Hunter*）を書き上げ、瞬く間にアメリカ中で話題になった。カーソン・マッカラーズは、1917年にジョージア州コロンバスの宝石商の娘として生まれた。幼い頃からピアノを習い始め、高校卒業後は職業的ピアニストを志し、ニューヨークのジュリアード音楽院の門を叩くが、学費を無くしてしまったことで、音楽の勉強を諦め、コロンビア大学の創作科で小説の書き方を学ぶことになる。創作科のクラスで執筆した原作 *The Mute* を、1940年に出版社からのアドバイスをを受けてタイトルを変更し、“The Heart is a Lonely Hunter” を発表した。

はじめに作品のあらすじを紹介する。この作品は3部構成で出来ており、舞台はアメリカ南部にある小さな田舎町である。第1部では作中の主な登場人物たちのキャラクターや生き立ちが描かれている。聾啞者のシンガーは、共に聴覚に障害を持つギリシャ人アントナプーロスと静かで幸福な生活を10年間続けていた。アントナプーロスは自分の考えを伝えることはほとんどなく、シンガーが手話で彼に話しかけるのが彼らの生活の基本だった。しかし、アントナプーロスの痲癩が原因で引き起こされるトラブルが元で、彼は遠く離れた精神病院に収容されてしまう。孤独に打ちひしがれたシンガーは、町をさまよい歩き、少女ミックの両親が切り盛りする下宿で一人居を構えることになる。彼は毎日のように、ピフ・ブラノンが切り盛りする酒場で食事をし、そこで資本主義を声高に批判するジェイク・ブラントや町唯一の黒人医師として働くコーブランドと知り合う。シンガーと知り合ったミック達は自分たちが抱える孤独を、まるで教会の告解室のようにシンガーに語りかけ、癒しを得る。

第二部では1938年の7月から1939年7月までの1年間の中で、物語が展開される。ミック達はシンガーに内心を語りつくすことで孤独を癒していたが、自分や身の回りの家族が危機的な状況に陥ることで、次第に安定していた生活が崩れてしまう。シンガーの方も、友人のアントナプーロスの元に定期的に訪問していたが、ある日彼の元を訪れると、看護婦からアントナプーロスの死を聞かされてしまう。絶望に打ちひしがれた彼は、下宿に戻るとピストルで命を絶ってしまい。第二部が終わる。

第三部ではシンガーが死んだ後の、ミック達の生活が描かれる。ミックは家計を助けるためにデパートで働き、ブラントは町を去り、コーブランドは病に伏す。ブラノンだけが変わらずに酒場を切り盛りし、町の住民たちを見守り続ける。最終部に当たる第三部では彼らが抜け出すことを望んでいた孤独や社会的な困難が今後も続いていくことを暗示し、物語は終わっている。

1.2 作品全体に通底する「孤独」

『心は孤独な狩人』に関わらず、マッカラーズの作品は「孤独」をキーワードに読まれ

ることが多い。この作品を日本語訳した村上春樹は作品の解説で以下のように評している。

マッカラーズの小説世界は、言うなれば個人的に閉じた世界である。それはマッカラーズによって語られ、描写されるマッカラーズ自身の心象世界だ。そこに出てくる人々は、それぞれの異様性を背負い、それぞれの痛みを耐え、欠点や欠落を抱えつつ、それぞれの出口を懸命に探し求めている。しかし多くの場合、その出口は見当たらない。[…] 人々はそのような宙ぶらりんの状態に置かれたまま、新たな夜の到来を待つことになる。

(村上 2020 : 600)

『心は孤独な狩人』では村上が指摘するように、1930年代後半の大恐慌にあえぐアメリカ南部の小さな町で、先行きの見えない未来に不安を抱え、もがきながら生活する人間たちが描かれている。彼らはそれぞれが性格上・身体上の特徴を持ち、苦痛が引くことが叶うよう「出口」を懸命に探す。しかし、本作品の最後を見ても分かるように彼らの願望は叶えられることなく、物語は終わるのである。では、こうした彼らの顛末と「孤独」はどのように結びついているのか、本章では考えていきたい。

1.2.1 Mute とは誰のことを指すのか？

先に紹介したように、*The Heart Is a Lonely Hunter* は当初 *The Mute* という題名で執筆されていた。Mute という言葉にはどういった意味が込められているのだろうか？
Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th edition を参照したい。

Adj

1. Not speaking
2. (old-fashioned) (of a person) unable to speak

一見すればこの語を指すのはシンガーやアントナプーロスを指すと考えられるだろう。彼らは口語による会話をせず、手話による会話中心で生活をしている。しかし伊藤 (2011 : 58) によれば、「自分の心の内をシンガー以外の他人に話さない」という理由で「その他の登場人物 (ミック、ジェイク、コーブランド医師、ブラノン) は身体的な啞者ではないが、心の内を語らない啞者の立場である」という分析をしている。

1.2.2 シンガーを取り巻く Mute たち ～ミック～

伊藤が分析するように、4人の登場人物たちは自分の悩みや葛藤を告白できる他人をシンガー以外に持たない。シンガーの下宿先の娘ミックは、様々な点で悩みを抱えている。兄弟が多いため小さい子供の世話をせねばならず、常に人でごった返す家に住むミックには一人になれる場所がない。そんな彼女は創作に対する熱意に溢れているが、貧困のためにピアノを習うことも出来ず、自分の表現に対する欲求を内に抱えている。さらに彼女は思春期の過渡期にあり、自分のセクシュアリティに対して不安を抱えている。服装はショートパンツを常にはき、まるで少年のような出で立ちのような彼女は姉に対して「なれるものなら、男の子になりたい」（『心は』：71）と語るほどである。ミックは「自分ひとりで見られる場所」（『心は』：87）を常に求めており、頭の中で願いを叶えたり、音楽を奏でたりすることで満足を得ている。彼女は経済的事情や、家庭環境、思春期の不安定な自我によって、自分の考えていることを他人に表現することが出来ず、その葛藤を内面に抱えこむ。そんな彼女にとって、シンガーはとても特別な存在となる。ミックにとってシンガーが重要であることがよく分かるのは、第二部で彼女の主催したパーティが失敗に終わった後の場面である。彼女は通い始めた学校で、どのグループにも属しておらず、どこかのグループの一員になるためにパーティを開くことを計画する。（『心は』：174）13歳から15歳だけの男女を集めたパーティは、どこかぎこちなく、彼女の思うようにはいかない。すると近所の幼い子供たちがパーティに乱入し、元々の参加者も交えてすっかり騒然とした雰囲気となってしまふ。彼らが乱入してきたことで、「高校のことや、大人になりかけていることとか、すべてどこかに忘れ去られてしま」（『心は』：192）い、彼女もまた子供のように家を飛び出すと、パーティ用のパンプスが引っかかり穴に落ちてしまふ。

「少女」から「大人」へと変わる思春期特有の移行の挫折と、他人と関わる機会の消失が描かれているという点でこの場面は象徴的である。彼女はパーティを成功させ「グループの一員」になることで、孤立した状況を脱却しようとした。そして、周りの女子たちのようにドレスを着て着飾ることで、「女性」としてアイデンティティを得ようとした。しかし、その試みは頓挫してしまい、彼女は打ちひしがれてしまふ。自宅に帰り、いつもの服装に着替えても、「今となっては彼女はもう、ショートパンツをはくには大きくなりすぎたように」（『心は』：194）感じてしまふ。つまり、彼女は純真無垢な子供の世界からもパーティを経て、追放されてしまふのである。彼女は再び家を飛び出し、音楽を聴きながら物思いに耽る。

「主よ、我を赦し給え。我、自らの為すことを知らざればなり。」どうしてそんなことを思いついたのだろう？今どき、神様なんて本当にはいないことを、誰もが知っているのに。自分がかつて神様ということで想像していたものを考えてみると、目に浮かぶのは、白く長いシーツを身にまとったシンガーさんの姿だけだった。神様は寡黙だ——シンガーさんの姿を思い浮かべたのも、おそらくはそのためだろう。彼女はその言葉をもう一

度口にした。あたかもシンガーさんに語りかけるように。「主よ、我を救^{ゆる}した給^{たま}え。我、自らの為すことを知らざればなり。」(『心は』:199)

自分の拠り所としていた世界から追放されてしまった彼女は、自分が何をすべきか分からない状態に陥ってしまう。そんな彼女が救いを求めるのが、本当の神ではなく、神の姿をしたシンガーだというのはとても象徴的である。シンガーは「寡黙」であり、彼女の全てを肯定する存在として、彼女の目には映っている。安心してコミュニケーションを行う相手を失った彼女は、シンガーに一方的に語りかけるという、信仰のようにも見える行為を通じてしか自分の考えを表現することが出来ない。しかし、二人の関係性はあくまでも相互的ではなく、一方的なものにすぎないのだ。

1.2.3 シンガーを取り巻く Mute たち ～コーブランド医師～

コーブランド医師もまた自分の心の内を語ることでできない人物である。彼は町の黒人居住地で医者をしており、住民たちから絶大な信頼を得ている。彼はこれ以上町に黒人の子供が増えることを危惧しており、「今ここにいる子供たちにチャンスを作る」ために「黒人のための優生学的出産」を説いてきた。(『心は』:125) 非常に頭が切れて、自らの「使命」に燃える彼だが、余りにも観念的な言葉を多く使い、説教じみた話ばかりをするせいで、家族からは距離を置かれている。

話し相手のいない彼は、シンガーの元に訪れ自分の使命を熱く語ることで、心に空いた穴を埋めていた。シンガーのことを、コーブランドはこのような印象で捉えている。

彼は賢い人であり、真実に向けられた強い思いを理解してくれた。他の白人たちにはできないことだ。彼は耳を傾けた。その顔には穏やかでユダヤ人的な表情が浮かんでいた。抑圧されてきた民族に属する人が身に着けた知見だ。(『心は』:224)

コーブランドはシンガーに対して、敵対する白人とは違った印象を持っている。「抑圧されてきた」側の人間として彼を認識し、沈黙する様子を彼が自分の思いを「理解」してくれていると考えている。しかし、シンガーは当時の黒人差別の惨状に対して、先進的な考えを持つ人間ではなく、彼はただコーブランドの話に静かに耳を傾けていただけだ。コーブランドは黒人社会に対する使命感や白人にそのことを理解してほしいという欲求をシンガーに映し出し、彼が理解者であるように身勝手にも思い込んでいるのである。

1.2.4 シンガーを取り巻く Mute たち ～ジェイク・ブランド～

ジェイク・ブランドもまた、コーブランド医師と同じように社会の変革を望む者である。貧困に喘ぐものたちを団結し、資本主義を打ち倒すために、彼はしきりに社会の不平等を周りの人間に説いて回る。しかし彼の話し方は「まるで彼の内部にあるダムが決壊したかのよう」(『心は』: 43) な激しい口調のため、ほとんど誰もその内容を理解することができず、いつも酔っ払いの戯言と一蹴されてしまう。人を集めるために真剣に語られた言葉は、かえってジェイクの周囲から人を遠ざけてしまっている。そんな中、ビフの酒場で出会ったシンガーは、ブランドにとってまさに運命の人だった。シンガーは意味が分からないなりに、ジェイクの言葉に対して思慮深げに頷いたり、微笑みかけたりする。ブランドは初めて自分の言葉が理解された気持ちになり、シンガーに対して語りかけ続ける。

1.2.5 「孤独」が生み出すシンガーへの依存

ミック、コーブランド、ブランドの3人の「孤独」の原因は3人とも「自分の心の内を語る事が出来ない」からである。つまり、周囲の人間に対して Mute であるということが彼らの孤独を決定づけている。ミックは家庭の経済環境や性的なアイデンティの揺らぎ、コーブランドは黒人であることと観念的な言葉しか使うことが出来ないという性格、ブランドは誰にも理解することが出来ない激しい口調によって、他人と精神的な結びつきを得ることが困難になってしまう。そして他人に自分の思いを伝えることのできない3人は、シンガーに対して熱心に語りかける。しかし、彼に語りかける行為は結果的に孤独を深めることに繋がる。シンガーは、彼らが一方的に話すことに対して抵抗を示さないためにまるで共感しているように見える。しかし、実際には彼は耳が聞こえず、話すことが出来ないために抵抗の意思を示すことが困難なのである。こうした事実を見逃した彼らはまるで自分が理解されているような感覚に陥ってしまう。Bradshaw (1999 : 120) はミックら3人に対して、シンガーを“Totalize”(=ある特定のイメージに閉じ込める)することで、自らの偏った自己認識を深め、最終的には孤立を深めていると分析する。さらに、彼らはシンガーを利用するばかりで彼のことを気にかけることもないため、彼がアントナプーロスという無二の友人と離ればなれになっているという事実気づくことは決してない。3人とシンガーとの関係は非相互的であり、彼らのやりとりが真の意味で孤独を埋める作業とは程遠いと言えるだろう。このようなシンガーに行われた3人の非相互的なコミュニケーションについては第二章でさらに詳しく見ていく。

1.3 Mute を生み出した作品舞台

ここまで本作品における「孤独」を抱える Mute 達を見てきた。ミック、コーブランド、ブランドの三人は自分の胸中を周囲の人間に語る事が出来ないために、孤独を胸中に募らせ、耳の聞こえないシンガーに語りかけることで、その孤独を癒してきた。ではこうした孤独は『心は孤独な狩人』の登場人物固有のものなのだろうか？筆者はそうではな

いと考える。マッカラーズは自身の内面の葛藤を作中の人物に反映させた反面（これについては3章で詳述する）、本節では当時の社会を生きた人々の姿を町の住民たちに映し出したと仮説を立ててみたい。

本作品に通底する「孤独」と並ぶもう一つの大きなテーマ、それは「貧困」である。ミックは家庭に経済的な余裕がないために、楽器を始めることが出来ず、内側から湧き出る創造に対する欲求を満たすことが出来ない。コーブランド医師もまた経済的な苦境によって困窮する黒人居住地区を救うために、「黒人のための優生学的な出産」を実現するべく一人奮闘してきた。ブランドは様々な町を渡り歩く中で、貧困に喘ぐ人々を目の当たりにし、暴走する資本主義を打ち砕くべく、周りの人間たちを巻き込もうと奮闘し続けた。

本作品の舞台となったのは、1930年代後半のアメリカ南部の町である。マッカラーズは同じくアメリカ南部のジョージア州で成人するまでの時期を過ごしており、そこでの経験が本作品に影響していると言ってよいだろう。1930代は世界恐慌の影響で経済が大混乱に陥り、また本作品でも言及されているがイタリアやドイツでファシズムが台頭しつつある時期である。『心は孤独な狩人』の世界の背景には、世界的に蔓延していた恐怖と不安が広がっている。シンガーたちの住む町の描写に注目してみると、当時の世界情勢をマッカラーズが小説世界に取り入れていたことがよく分かる。

町は深南部の真ん中であつた。夏は長く、寒い冬が何か月も続くことはきわめて希だつた。[...]そこはけっこう大きな町だつた。メインストリートには、商店か会社が入つた二階建てか三階建ての建物が、五、六ブロックにわたつて軒を連ねていた。しかし町でいちばん大きな建物はいくつかの工場であり、住民の多くがそこで働いていた。紡績工場は規模が大きく繁盛していたが、町の労働者の大半は貧困状態にあつた。通りで見かける人々の顔はしばしば、空腹と孤独の切羽詰まつた表情を浮かべていた。(『心は』:13)

彼らの住むアメリカ南部の町の描写からは、工業化による住民たちの腐敗や貧困、そして「孤独」が見て取れる。Millichap (1971:15) は、この町の名前が特定されていない点に注目し、この町が「どこにでもある南部の工場都市と解釈することができ、工業化・都市化された南部やアメリカ、さらには現代の世界全体を象徴する存在となっている」と指摘している。つまりマッカラーズは本作品の中で現実世界と似たような世界を作り上げることで、近代化や世界的な恐慌に苦しむ人々を描こうとしたのではないだろうか。さらに自分の心の内を語る事が出来ない、つまり“Mute”であることの孤独は先に紹介したような本作の登場人物だけでなく、同時代の世界中の誰もが抱えていたとマッカラーズが考えていたと読み取ることも出来る。シンガーたちの住む町は近代化によって生み出された荒廃した街であり、その中で「本質的な人間性を表現することが非常に困難」なために「共同体から切り離された結果、各人は危険な夢の内面世界に入り込み、存在論的に孤独な状態に陥って」しまっているのだ。(Millichap 1971:15)

さらに、ミックが「今どき、神様なんて本当にはいないことを、誰もが知っている」

（『心は』：199）と言うように、工業化によってコミュニティを分断された人間たちにとって最後の希望となるはずの宗教も、ここでは意味を成していない。マッカラーズは本作品で、救いの希望を持たず、あてもなくさまよい続ける人々を登場させることで、世界恐慌や戦争への不安を持った現実を生きる人々を描きたかったのだろう。近代化の過剰なまでの発展はコミュニティの崩壊や信仰に対する揺らぎを引き起こし、人々を孤独にしたのである。自分の心の内をさらけ出すことのできる存在は人々から奪われ、シンガーのような「寡黙」な存在を通してしか、自己のアイデンティティを確立することが出来なくなってしまった。“Mute”というのはミック、コーブランド、ブラントの3人だけでなく、工業化によって孤独になってしまった町の人々でもあり、1930年代後半の不安に満ちた世界をきた人々でもあり、そして日々加速する資本主義と技術の発展の影響下で生きる私たち読者でもあるのだ。

1.4 彼らの「孤独」とは何なのか

ここまで中心人物である聴覚障害を持つシンガーではなく、3人の登場人物（ミック、コーブランド、ジェイク）の孤独を分析した。彼らの孤独の原因は「自分の心の内を誰かに打ち明けることが出来ない」ことであり、伊藤の言葉を借りれば彼らはMuteなのである。環境や性格などによって誰にも自分の考えを表現することが出来ず、悶々として暮らしていた彼らは、シンガーという「寡黙」な存在を見つけ、自分の思いをこれでもかど彼に語りかけ続ける。シンガーは彼らの言動に抵抗を見せることなく、ただ黙々と寄り添い続ける。しかし彼らのコミュニケーションはシンガーに対して極めて一方的な試みであり、孤独を癒すどころか、自分の話したいことだけを彼に話し続けることで、自己認識を歪め、かえって孤独を深めてしまっている。Muteである孤独は、シンガーへの依存を生み出し、より孤立を深める結果になったのだ。

最後に作中の舞台に注目し、彼ら3人だけでなく、彼らの住む町の住人、さらに『心が孤独な狩人』の舞台である1930年代後半に現実に生きる人々が、“Mute”である孤独を共有していたのではないか、という分析を試みた。作中では恐慌と工業化によって荒廃した町の模様が登場人物たちの住む町として描かれている。実際に作品の舞台である1930年代の後半は世界恐慌やファシズムの到来によって、世界中が先行きの見えない不安に覆われた時代であった。貧困や過度な工業化、そして宗教の権威の失墜によって、ミック達の住む町の住民はやり場のない不安や孤独に苛まれている。彼らからは共に語り合う仲間を見つけるコミュニティも、悩みや罪を告白する神も奪われており、ミックたちと同じように自分の心の内を語る相手をどこにも見出すことが出来ない。マッカラーズは1930年代の後半に出身地のジョージアで10代を過ごしているため、当時を生きる人びとの孤独を肌で感じ、作中に盛り込んだのではないだろうか。自分の心の内を誰にも語る事が出来ない状態、つまりMuteである孤独は、当時を生きる人間たち誰もが感じていたのだ。

2. 「ろう者であること」と「孤独」

これまで聴覚障害を持つシンガーの周囲の人物たちの孤独について分析をしてきた。彼らは様々な理由によって自分の心の内を明かすことが出来る人物を誰も持たず、シンガーのような寡黙で、ずっと話し手に寄り添う人物に依存してしまうのだった。

本章では彼らの依存先であり、『心は孤独な狩人』の中心人物であるシンガーに焦点を当てたい。ミック達がシンガーに行った一方的なコミュニケーションは、彼個人を一切顧みしていない点で暴力的である。こうした非相互的な関係が生まれてしまうのは、シンガーの聴覚の障害にその原因があると言えるだろう。耳が聞こえず、発話も不自由なために、彼は「寡黙」な存在として、周囲の人間が孤独を癒すために「利用」されてしまったのである。本章では依存先としてのシンガーの立場を、当時のアメリカ社会におけるろう者の立場と結び付けて考えていきたい。20世紀初頭のアメリカ社会では、移民の流入によって正当な「英語」が重視され、「手話」は英語とは異なる言語として低い扱いを受けてきた。一方で手話への抑圧が高まる中で、ろう者同士のコミュニティも発達し、アメリカ社会において市民権を得てきたという歴史もある。様々な観点からシンガーに行われてきた一方的なコミュニケーションを読み取ってみたい。

2.1 シンガーに対する町の人々の依存

2.1.1 シンガーとアントナプーロス

改めてシンガーがミックの下宿に来る前の生活を分析してみたい。聴覚に生まれつき障害を持つ彼は、同じ障害を持つギリシャ人アントナプーロスと同居をしていた。シンガーは銀器の彫刻士として宝石店に勤め、アントナプーロスは従弟の経営する果実店で働いていた。彼らの生活は慎ましくも、平和に満ちたものだった。

ふたりの唾たちは他に友だちをもたず、それぞれの職場にいるときを別にすれば、いつも二人きりでいた。毎日がほとんど同じことの繰り返しだった。というのは彼らが常にべったり二人だけでいたので、その生活習慣を崩すことなど入り込む余地もなかったのだ。週に一度、二人は図書館に行った。シンガーが推理小説を借り出すためだ。金曜日の夜には映画を観に行った。そして給料日には彼らはずっと、「アーミー・アンド・ネイヴィー・ストア（訳注 軍放出品販売店）」の二階にある十セント写真店に行き、そこでアントナプーロスは写真を撮ってもらった。彼らが習慣的に訪れる場所といえばそれくらいだ。その町には彼らが目にしたこともない場所がたくさんあった。（『心は』：12）

彼らの生活はささやかながらも充実しており、その描写は荒廃した町で苦しむ孤独な住民たちは正反対であり読者の目には牧歌的に映る。シンガーはいつも、仕事から帰宅するとその日にあったことを同居人に向けて手話で熱心に話した。アントナプーロスの方から何か言葉を発することはなく、シンガーの言葉を理解しているそぶりをあまり見せなかった。シンガーはそれでも毎日のようにアントナプーロスに話し続け、ぎこちないながらも平和な二人の暮らしは10年ほど続いていた。

しかし、アントナプーロスが病に倒れるとその生活は一変する。回復して社会に復帰しても、アントナプーロスは以前より癩癪を起すようになり、出先でトラブルを立て続けに引き起こす。シンガーはそんな彼を懸命に支えるも、見かねたアントナプーロスの従弟が彼を遠く離れた精神病院に行く手はずを整えてしまう。シンガーの抗議もむなしく、二人は離れ離れに暮らすことを余儀なくされるのだ。

2.1.2 話す「言語」を失ったシンガー

アントナプーロスの去った後、彼は「見知らぬ土地に、ひとりぼっちで残され」（『心は』：339）たという感覚に苛まれ、絶望した。10年間過ごした町も、アントナプーロスとの生活が中心にあったため、彼がいなければシンガーにとっては荒廃した未知の場所として浮かび上がる。シンガーはその後、ミックの下宿に居を構え、ビフ・ブラノンの酒場に居を構える。一人静かに食事をするシンガーの姿は、ミックやブランド、コーブランドのような「孤独」な人間たちを惹きつけた。彼らは知り合いになると、頻繁に彼のもとを訪れ、熱心に自分の思いを語りかける。

『心は孤独な狩人』における「孤独」とは、第一章で分析したように「自分の心の内を誰にも語る事が出来ない」ことで生まれるものであった。シンガーがアントナプーロスと離ればなれになった後に陥った孤独もまた一緒であり、なおかつミック達よりもより深い次元にあるものである。なぜなら彼からは自分のことを話す「言語」そのものが失われてしまったからである。シンガーの話す言語はその名前（Singer=歌う者）とは裏腹に、手話である。彼は幼い頃に孤児になり、聴覚障害者のための施設に入ると、そこで手話や読字を習得した。アメリカ式の片手を使う手話も、ヨーロッパ式の両手を使う手話もマスターし、さらに読唇術や発話までも出来るようになっていた。しかし、口で話すことを彼は好まなかった。

学校では彼はきわめて聡明だと思われていた。他の生徒達より先に学科を習得した。それでも結局、唇を使ってしゃべることにはどうしても慣れなかった。それは彼にとって自然ではない行為であり、舌は口の中でまるで鯨のように感じられた。そうやって喋るときに相手の顔に浮かぶぼかんとした表情からして、自分の声はきっと野獣の声のように聞こえるか、あるいはしゃべり方に何かしら人に嫌悪を催させる要素があるのだろうと思っ

た。(『心は』: 20~21)

彼は発話を試みるもそのごちなさに辟易し、手話で語ることを自身のアイデンティティとして選択していた。彼にとって手話は「とても簡単に自分の語りたいことを形にすることができ」(『心は』: 21)る言語だったのだ。

しかし彼はアントナプーロス以外に手話を話す友人を持たなかった。何度か同じ当事者と会う機会もあり、一度は友人を作る機会が訪れるも、アントナプーロスが勘違いによって癩癩をおこし、その試みも頓挫してしまうのである。シンガーにはアントナプーロス以外に、友人も同じ言語を話す仲間もいなかったのだ。

彼と同居している間はそれでも幸せに暮らすことができたが、アントナプーロスと離ればなれになってしまった後は、アイデンティティである手話を話す仲間を失ってしまい彼は沈黙せざるを得なくなる。簡単な事柄を書いた紙(自分は耳が聞こえないことや食べたい料理)を見せる以外は、シンガーは自分の意思を伝えるということを殆どしなくなってしまふのである。彼は日常生活において自分の話す「言語」を失い、ミックたちよりも深刻なレベルで自分の意思を表現することができなくなったのだ。

2.1.3 一方的に語りかけることの暴力性

言語を失った彼は他者に対して沈黙することを選ぶ。静かにそこに佇む姿は、他者の目にとって「この男は他の人間がこれまで聞いたことがないものを聞きとり、他の人間がこれまで考えつきもしなかったものごとを知っている」(『心は』: p43)という印象を持つほどまでに、神聖さを帯びて映るようになる。そんな彼に孤独な人間たちは惹きつけられ、ありとあらゆることを彼に語っても、微笑みを絶やさず、ただそこにずっと彼は居るのである。しかし、彼にとってそれは困惑を引き起こすものでしかなかった。

最初のうち、四人の人々が何を言っているのか、まるで理解できなかった。彼らはとにかくよくしゃべった。何か月かが過ぎたが、彼らはさらに熱心にしゃべり続けた。彼らの唇の動きにも馴れ、口にする一語一語が理解できるようになった。そしてしばらくすると、彼らが何を言おうとしているのか、しゃべり出す前からわかるようになった。四人が話す内容はいつだって同じだったから。(『心は』: p342)

語りかける方は自分の言葉が理解されていると思っているが、シンガーからすれば彼らは何を言っているのか分かることができない。しかし、徐々に回数を重ねていくにつれ彼らの言葉を理解できるようになる。彼らは皆一様に「誰にも理解されない自分の思いや願望」をシンガーに語りかけており、しまいには彼らが話す前から手に取るように分かってしまう。「全てを理解する存在」としてのシンガーは語りかける側の作り上げた像であ

り、シンガーはそれに異を唱えるための言語も持たないために、このような不均衡な関係が生まれてしまうのだ。

Steele (2021 : 59) は白紙のキャンバスに絵を描くように、シンガーを自分たちの思うような理想の像に作り変える暴力的なコミュニケーションを「健常者たちが彼の聴覚障害を純粋に象徴的な枠組みに押し込め、無限の比喩的な代替物の連鎖へと置き換え」ていると指摘している。ミック達はシンガーの中に自分が見たいものを映し出しており、聴覚障害を持つことによる苦しみや、かけがえのない友人と離ればなれになったことによる辛さは前景化しないのだ。

シンガーを「象徴的な枠組みに押し込める」暴力はミック、コーブランド、ジェイクの3人だけではなく、時間が経つにつれ町全体で行われるようになったという点にも留意したい。

唾に関する噂は豊富かつ多様なものだった。ユダヤ人たちは彼をユダヤ人だと言った。メインストリートの商人たちは、彼は大きな遺産を引き継いでおり、とても裕福なのだと言った。迫害された繊維業組合の連中は、あの唾はCIO（産業別労働組合会議）のために働いているオルガナイザーだと明言した。何年も前に町にふらふらと入り込んできて、今ではリネンを扱う小さな店の裏に、家族と共に慎ましく暮らしている孤立したトルコ人は、あの男はトルコ人だよと熱っぽく妻に語った。私がトルコ語でしゃべっても、あの唾はちゃんと理解するからね、と彼は言った。そしてその話をするとき、彼の声音は温かくなり、子供たちと口論することも忘れ、その頭は計画や行動で満ち溢れるのだった。（『心は』：333）

シンガーに理想の像を見る人間は実に多様である。事業に成功している商人や失敗している商人も、マイノリティとされているユダヤ人（実際にシンガーはユダヤ人であるのだが）や移住してきたトルコ人もが、シンガーを何かの象徴としてとらえている。恐慌にあえぐ町で、様々な人種や階級の人間たちがひしめきあい、時に対立しあう中で、シンガーは幽霊のように透明な存在として、そのような図式の外に置かれ、彼ら一人一人を受け入れる存在として利用されているのだ。

2.2 ろう者としてシンガーの孤独

彼の聴覚障害を象徴的なものとして扱うという暴力は、彼のアイデンティティである手話が奪われてしまったことにより起きた。話す言葉を失ってしまったことにより、シンガーは寡黙な存在として、あらゆる人の理想の像を描き出す白紙の存在になってしまったのである。シンガーがこのように「正しい」（＝口話）コミュニケーション方法を習得すべききか悩む姿や、その試みに挫折する姿は、19世紀末から20世紀前半にかけてのアメリカ

カでの手話の位置づけやその政治的な扱いをめぐる議論を反映している。本節では、当時のアメリカ社会における手話の位置づけを手掛かりに、シンガーの心理と彼になされた暴力を分析してみたい。

2.2.1 手話を巡る論争

手話は成立当初から現在のように社会から認知された言語ではなかった。1880年にイタリアのミラノで開催された第二回国際ろう教育会議で、手話教育をヨーロッパとアメリカ全体で禁止する決議が採択され、口話法が世界中で大きな支持を集めた。これを受けて全米ろう協会 (National Association of the Deaf) が結成され、各地で大会を開催し、口話法中心の教育への反対運動を進めていった。また各教育機関で口話法の教育が推し進められる中で、Gallaudet University のように一貫して手話の保存と教育務める大学も存在していた。(Steele 2021:61)

Sanchez (2015:67) はアメリカ社会における手話に対するこのような弾圧には、19世紀末から20世紀前半にかけて、世界各国から移民が大量に流入してきたことが関係していると分析している。アジアやヨーロッパなど様々な地域から移民が流入してきたことによって、アメリカ英語が「過度に包括的」で「正確性に欠けた」ものに変化するという懸念が生じた。特に南北戦争以降、一つの国家としての「アメリカ」に揺らぎが生じていたために、言語の問題が国民的アイデンティティと密接に結びつき、英語の運用能力が誰をアメリカ人とみなすかを明確に線引きする手段になった。当時のアメリカ大統領のセオドア・ルーズベルトの発言は、いかに英語の権威化が国家的なものであったかを示している。

この国に存在を許される言語は一つだけ、それは英語だ。我々は、溶鉱炉が国民をアメリカ人として、アメリカ国籍を持つ者として生み出すことを望んでいるのであって、多言語の寄宿舍の住人を望んでいるわけではない (Crawford 2000:8) ※筆者訳

この発言の前年の1924年には、南欧・東欧系移民の制限と日本人移民の禁止を制定する法律がアメリカで成立しており、当時のアメリカ社会がいかに英語以外の言語使用者に対して排外的であったかが見て取れる。

2.2.2 手話に対する同化政策と差別

アメリカ社会における英語の権威化は、言語マイノリティに対する同化政策と優生学に基づく差別を引き起こした。当時T型フォードで有名だった自動車会社の社長ヘンリー・フォードは、アメリカに住む人に「適切な方法」で英語を話すことを学ばせるために、フォード英語学校を開設し、同じ敷地内に自動車工場も建設した。フォードの英語学校では言語だけでなく、人々の身体の外見、所作なども教育され、個々人の標準化し効率的に利

益をあげる市民を育てることを目的としていた。(Steele 2021:63) 手話もまた英語以外の言語として排斥の対象となり、先に説明したようにろう学校でも口話法の教育がなされるようになった。

Sanchez (2015:68) は言語と身体に対する規制が強化される中で、両者が交差する場所に生まれる新しい規範を *Communicative Norm* (コミュニケーション規範) と呼んだ。近代化が進み、帝国主義を推し進めていた一方で、移民の流入により国家共同体としてのアイデンティティに揺らぎが生じていたアメリカでは、フォード英語学校のような施設を作ることによって「アメリカ人らしさ」をあらゆる国民に付与し、より効率的に利益を生み出す存在として利用価値を高めようと試みたのだ。

手話が弾圧の対象となったのは、他の言語と違って、音声的な言語ではなく身体の動作を伴う言語であったからである。手話は身体から切り離すことが出来ない言語であり、発声による言語が唯一の言語情報伝達方法ではないという事実を可視化してしまうために、脅威として受け取られてしまったのだ。

シンガーが学校で手話を習得したのち、読唇術や口話法を学んだことは同時代の手話教育を反映したものだと考えられる。Steele (2021:64) はシンガーがアメリカ手話とヨーロッパの手話を早くから学び、後に口話法を習得していることから、「ルーズベルトによる非標準的な発話を罰するための立法が第一次世界大戦前に行われたことを考えると、シンガーは孤児として育てられ、最初に手話を学んだ手話教育の学校を経て、その後口話教育の学校に入学した可能性が高い」と分析している。つまりシンガーは国家的な言語と身体に対する規制政策によって、アイデンティティである手話を奪われ、代わりに口話法を学ぶことを余儀なくされたのである。当然、このような言語政策が敷かれていた世の中であったため、手話の使用人口は減り、当事者以外で手話が分かる人間は少なかったと言ってよい。

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて聴覚障害を持つ人々に対して、優生学的な差別が行われていたことにも注目しなければならない。科学技術が飛躍的に進歩しつつあった近代のヨーロッパにおいて、古くから信じられてきた手の動きを使ったコミュニケーションが人類の発展の初期段階を表しているという説が、科学的理論と結び付けられ、手話に反対する根拠として用いられた。(Sanchez 2015:69) 著名な人類学者であり、映画監督フェリックス＝ルイ・レノーは手話に反対する立場をとっており、「すべての未開民族は、自分たちの考えを表現するためにジェスチャーを使う。彼らの言語は非常に貧弱で、意思を伝えるのに十分ではない。原始人にとって、ジェスチャーは言葉に先行する。※筆者訳」(Fatimah Tobing 1996:3) と説明している。このような考え方は手話を矮小化し、原始時代の過去の遺物として位置づけ、近代的な人間には不必要な言語だとして捉えている。優生学的な価値観によって手話は貶められてしまい、口話法を指示する者たちの非難の対象となった。こうした差別が先に紹介した同化政策の根本にある考え方だと言ってよい。

2.2.3 ポケットに手を入れるシンガーの心理

当時の手話を巡る論争と照らし合わせてみても分かるようにシンガーを取り巻く環境は厳しいものだった。自由に自分の事を語ることが出来る手話は、国家的な言語政策によって、口話法への移行を余儀なくされる。彼は懸命に発話を試みるも、それは彼にとって「自然ではない行為」であり、自分の言葉が相手に全く伝わらず、不快な気分させているのではないかという不安を常に抱えなければならない状況に陥ってしまった。アンテナプーロスと離ればなれになってしまったシンガーは手話を共に話す仲間を失い、絶望の末に発話することを拒絶してしまう。それ以降、彼は発話することも、手話で誰かと話すことも止めてしまい、外の世界に対して自己表現をする機会を最小限にまで収めてしまう。しかし、自己表現に対する彼の抑圧は身体的な反応を引き起こし、彼を苦しめることになる。

両手は彼にとって責め苦のようなものだった。その手は休むことを知らなかった。眠っている時でさえぴくぴくと動き、夢を見て目が覚めると、その手が目の前で無意識に言葉を形作っていることもあった。彼は自分の手を見るのが好きでなかったし、それについて考えるのも嫌だった。[……] 部屋の床を歩いて行き来するとき、指の関節をぽきぽきと鳴らし、痛みを感じるまで強く指を引っ張ったものだ。あるいは手のひらで拳を打った。一人きりで友人のことを考えているときなんか、両手が知らぬうちに言葉を形作り始めていることもあった。そしてこれはまるで独り言を言っているところを見られた人のように思い当たり、何か道義にもとることをしたような気持ちになった。恥じらいと悲しみが混じり合い、彼は両手を重ねて背後の隠すのだった。しかしその両手は彼を休ませてはくれなかった。(『心は』: 342—343)

この描写は、シンガーが社会的抑圧と内面的な欲望との狭間で葛藤している様子を映し出している。手話は彼にとって自然なコミュニケーションであるにも関わらず、社会的な抑圧を内面化し、彼はそれを「道義にもとる」行為とみなしてしまう。一方彼が自らの手に対して抱く「責め苦」の感覚は、身体が単なる自己の一部ではなく、自律的な存在として意識的な抑圧に対抗していることを示唆している。彼は社会的規範と身体的な欲望の板挟みになり、孤独に苦しみを抱えるのである。

2.3 アンテナプーロスに対するシンガーの依存

社会的な規範によって、シンガーは自分の言葉である手話を使うことをアンテナプーロス以外に使うことができないでいた。アイデンティティである言語を限られた人間としか共有できないという状況は、その人に対する依存を招く。ここまでシンガーに対する町の人々の依存を分析してきたが、シンガーもまたミック達と同じようにアンテナプーロスに依存してきたのである。10年間の同居生活の間、シンガーは仕事から帰るといつもアンテナプーロスに熱心に語りかける。彼は自分が語ることを友人がどれほど理解しているか判

断することができなかったが、「でもそれはどうでもいいこと」（『心は』：10）だと手話で語りかけ続ける。このようなシンガーの心理は、二人が離れ離れになったのちに彼がアントナプーロスに対して手紙を書こうとする場面にも表れている。

アントナプーロスは字が読めないという事実も、シンガーが彼に手紙を書く妨げにはならなかった。その友人が紙に書かれた言葉の意味を識別できないことを、彼は前々から承知していた。しかし、月日が経過するに従って、あるいは自分が間違っているのかもしれないと想像するようになった。[...] 彼は手紙を書くにあたり、そんないくつかの自己弁明をおこなった。というのは彼は、戸惑ったり悲しくなったりしたとき、いつもその友だちに手紙を書きたいという強い欲求に襲われたからだった。（『心は』：352）

アントナプーロスに対して一方的に手話で語りかける彼の行為は、ミックたちがシンガーに対して行ったことと類似している。彼らは貧困や人種差別など様々な抑圧によって、自分自身の思いを表現することが誰にもできず、シンガーを「寡黙な理解者」としてそれぞれの思うような理想の像に作り替え、彼に語りかけることで孤独を癒そうと試みた。シンガーもまたアイデンティティである手話が社会的な抑圧によって制限され孤独に陥っていた。同じ境遇であるアントナプーロスに彼は熱心に語りかけることで、胸に秘めた思いを吐き出し、孤独を解消しようとする。そのとき、ミックたちが彼にするのと同じように、自分の話が理解されるかを度外視して、アントナプーロスを理想の理解者に仕立て上げ、一方的に語りかけるのである。

しかし彼の試みもアントナプーロスの死によって終焉を迎える。彼が病院に見舞いに行くと、いつものベッドにアントナプーロスの姿はなく、既に亡くなっていることを告げられる。看取ることも叶わずあっさりとアントナプーロスとの永遠の別れを知らされたシンガーは、悲嘆にくれて家路につく。その道中、店に入ると3人のろう者たちが手話で語り合っているのを見かけ、彼らの会話に加わる。しかし「自分の名前と、住んでいる町の名前を教えたが、そのあと自分自身を語るために何をどう言えばよいのか」（『心は』：541）が分からなくなってしまい、シンガーは黙ってしまう。アントナプーロスを失った直後に同じ当事者とせつかく出会うことが出来たのに、彼らとコミュニケーションをとることが叶わないのは、シンガーがアントナプーロスを「数少ない手話の理解者」として頼りにしていただけではなく、「自分自身を唯一曝け出すことが出来る友人」として、精神的に依存していたことが示唆される。社会的な抑圧に苛まれ、手話を同居人以外に話すことが出来なかったシンガーは知らず知らずのうちに、彼に依存し、他の誰にも自分の事を語るができなくなったのである。同じ境遇の当事者との関わりの道すらも絶たれてしまうと、彼は家に帰り、胸に銃弾を撃ち込んで自らの命を絶ってしまう。

2.4 シンガーの自殺を引き起こした社会的な抑圧

彼の自殺はマイノリティに対する社会的な抑圧と、それによって生じた歪んだ精神的な依存の結果である。シンガーは 19 世紀末から続いたアメリカの排外的な言語政策の犠牲者であった。自由に話すことが出来る手話を奪われた彼は、ぎこちなく話すことしかできない口話を強制され、自分の話が誰にも伝わらないのではないかという不安と、身体の内側から沸き起こる手話を使いたいという欲求に苛まれる。そして自分の言葉を奪われたアントナプーロスに積極的に話すことで、心の隙間を埋めようと試みる。しかし、同居人はシンガー以外とコミュニケーションをとることが出来ないために、他の聴覚障害を持つ当事者とかかわりを持つことが困難である。そのためにシンガーはアントナプーロスに必然的に依存してしまう。彼と離ればなれになると、彼は言葉を使う相手を失い、沈黙する。そんな彼に惹かれた孤独を抱える町の人々は、彼を各々の理想的な理解者の像に象徴化し、彼に一方的に語りかけた。しかしアントナプーロスの死は彼にとって決定的な打撃となった。なぜなら彼の「唯一」の依存先である彼が去ってしまうと、他の誰にも自分の事を表現することができず、外の世界では「誰かの理想の理解者」として利用される現実しか待っていないからである。

3. カーソン・マッカラーズはなぜ障害者を登場させたのかーレズビアンとしての彼女の当事者性と登場人物の結びつきー

ここまで『心は孤独な狩人』における「孤独」というテーマを手掛かりに、本作品の分析を試みてきた。作品の登場人物たちは社会的な抑圧や身体に関わる困難によって、自分自身の考えを誰にも表現することが出来ず、孤独になっている。本章では聴覚に障害を持つシンガーや、あまりにも早口なために誰にも理解されないブラント、長身で「女性らしく」ない相貌の少女ミックなど、孤独を抱える本作品の登場人物たちの多くが身体的な特徴を抱えているという点に注目したい。作者であるマッカラーズは身体的な特徴や障害を抱えている人物を多く登場させており、「孤独」を語る上で彼らの存在が重要であると話している。そして、彼女もまた幼い頃から体が弱く、公にはしていなかったがレズビアンとしての一面もある人物だった。同じような境遇、あるいは違う境遇の中で苦しむ当事者たちを、彼女はどのような思いで登場させたのか、本章では考えていきたい。

3.1 マッカラーズ作品における障害者表象

3.1.1 障害者に対する象徴化

『心は孤独な狩人』において、シンガーは他の登場人物たちと同じように自分の事を表現することが出来ないために、孤独であった。一方で彼の孤独は、聴覚に障害を抱えていたために、より深いレベルにあったと考えることが出来る。自分のアイデンティティである手話が社会的に制限されていた時代で、ぎこちない口話法で会話することを余儀なくされたために彼は自分のコミュニケーション方法に対して不安を抱えてしまい、会話をする人間に限られてしまう。さらに、同じ障害を持つ同居人のアントナプーロスとは簡単な会話しかせず、また癩癩持ちのために、他の当事者たちと交友関係を持つこともかなわず、半ばつききりの生活を余儀なくされている。二人だけの生活はシンガーに同居人に対する精神的な依存を引き起こし、アントナプーロスと離ればなれになってしまうと、彼は途方に暮れてしまい、誰にも自分の考えを表現しようとしなくなってしまう。二人の慎ましい暮らしは、かたや牧歌的な生活のようにも見える一方で、マイノリティを排斥する社会構造によって孤立してしまい、依存しあうことを余儀なくされた障害者とみることも出来る。

寡黙となった彼は、2章でも触れたように町の住民たちから理想的な理解者として頼られるようになる。世界恐慌下の工業地帯の町において、彼らもまた孤独だったのである。シンガーは各々にとっての理想的で最適な理解者として、彼らの目に映るようになり、彼らは寡黙なシンガーに対して、独白を執拗に行う。

本作品における町の住民によるシンガーを「象徴的な枠組みに押し込める」(Steele 2021:59) 行為は、当事者以外の人間が障害者を表象するに当たって発生するジレンマと重なり合う。町の住民たちは、シンガーの聴覚障害者としての孤独や苦しみに目を向けることはなく、自らの見たい姿を彼に照らし合わせている。こうした行為は、程度の差こそあれ、当事者以外の作者がマイノリティを作品に登場させる上では起こりうる。作者が物語を通じて描きたい心境や、展開させたい物語によって、登場人物の性格や背景は割り振られる。仮に当事者以外の作者が、作品に重要だと考え、物語にマイノリティを登場させる時、その当事者は作者の描きたい物語に沿った姿に変形する。当然ながら、その当事者の境遇や心境が全て物語に反映されることは困難である。なぜなら、物語に自分以外の人間を登場させること自体が主観的な試みであり、作者はその当事者のことをどれだけ丁寧に取材しても、全くもって忠実に映し出すことは出来ないからである。

3.1.2 精神的な不自由さ

では、マッカーズはマイノリティをどのような意図で作品に登場させたのだろうか？自身のエッセイの中で、彼女はどのように語っている。

精神的な孤独というのが、私が最も描きたかったテーマです。最初の本 (= 『心は孤独

な狩人』※筆者注)は、ほとんどそのことについて書きましたし、他の作品でも何かしらの形で書いてきました。愛、特に返すことも見返りを得ることも出来ない愛し方しかできないことが、私の選んだ特徴を持った人々を書く上で何よりも重要でした。なぜなら彼らの身体的な障害は、愛することや愛を受け取ることができない精神的な不自由さ、つまり精神的な孤立の象徴だと考えていたからです。(McCullers 1975:280) ※筆者訳

彼女は精神的な孤独を描くために、身体的な障害を持つ人物たちを登場させるのが適任だと判断した。彼女によれば、身体的な障害が「愛することや愛を受け取ることができない精神的な不自由さ」を象徴しているという。障害者の「精神的な不自由さ」に関して、Baldanza (1975:152-153) のアメリカの南部文学におけるプラトニズム的な愛の特徴についての分析を参照したい。Baldanzaによれば、アメリカの南部文学に登場する障害者は「身体的および精神的な欠陥によって、正常に人と交流をする可能性が奪われており、愛が成就するのは奇跡的」であるために、「感覚に依存する物理的な世界を超越し、Spiritual な経験や価値を重んじるプラトニズム的な価値観」を持っていると分析している。『心は孤独な狩人』に登場する人物たちは、他人と交流することが出来ない不自由さを、社会変革に対する情熱や、音楽による表現や、誰かに一方的に語りかけることによって解消しようとする。そこには人との相互的・身体的な交流は存在せず、精神的な世界の中で彼らは孤独を癒そうとするのだ。

3.2 マッカラーズの人生と精神的に孤独な登場人物たち

彼女はなぜ精神的に孤独な人間を作品に登場させようとしたのだろうか。彼女自身が作品の登場人物たちと、何らかの共通点があったと考えることができる。ここではマッカラーズの実人生を読み解くことで、本作品を分析してみたい。

Jenn Shapland はマッカラーズが女性と交わした手紙から着想を得て、彼女の実人生を死後数十年経った現在に、彼女をレズビアンとして描きなおした作品 *My Autobiography of Carson McCullers* を 2020 年に発表した。本人もレズビアンという Shapland は、世に出回っているマッカラーズの伝記が、彼女を異性愛者として描いており、彼女の本心とはかけ離れていたのではないかと指摘する。

カーソンのレズビアンとしての人生は、はっきりとした形で、色んなところで垣間見ることができる。ただ、それらは別の物語、つまりストレート（異性愛者）の物語の中に収められてしまう。あくまでも「普通」の人生の中で、女性に対する説明のつかない憧れや友情が、一時的に表れるだけだ。(Shapland 2020:19) ※筆者訳

1937 年、彼女は 20 歳の時にリーブス・マッカラーズと結婚をする。そのことについて

て、1976年にヴァージニア・スペンサー・カーの発表した『孤独な狩人 カーソン・マッカラーズ伝』では、以下のように彼女とリーブスの関係を記している。

それに彼女にはエドウィン・ピーコックが現れる以前には、若い男性との交際はただの一度もなかったのです。ところが、彼女に女性としての自覚を呼び起こさせたのがこのリーブスだったのです。(Carr 1976=1996:63)

この伝記の書き方ではマッカラーズの同性愛的な傾向は無視され、異性愛者として描こうという試みがなされている。さらに Shapland (2020 : 46) はマッカラーズと精神科医とのセラピーのカルテを読み解き、男性と性交渉することに不安を覚えていたカーソンに対し、リーブスが強引に迫ったと彼女が明かしたと述べている。彼は「自分は君のことを愛しているから、君がレズビアンかどうかは気にしていない」と彼女に伝え、結婚式の話題を持ち出したという。結婚をめぐる彼女と夫とのやりとりは、作中におけるミックとユダヤ人の少年のハリー・ミノウィッツとの関係を彷彿とさせる。彼らは二人とも学校で居場所がないことで親しくなり、よく外で出かけるようになる。そして自転車で遠くの山までピクニックに行った際に、二人は性交渉に及び、以下のような会話をする。

彼女は地面に指で穴を掘って、死んだ蟻をそこに埋めた。

「僕の過ちだった。姦淫はどのように考えても恐ろしい罪だし、君は僕より二歳下で、まだ子供なんだ」

「いいえ、そんなことはない。私はもう子供じゃないもの。でも今では、子供だったらよかったのと思う」

「聞いてくれ。もし君がそうしなくちゃと思うのなら、僕らは結婚することもできる。こっそりと、あるいはそうじゃなくても」

ミックは首を振った。「私は楽しくなかった。私は誰とも結婚しない」(『心は』: 457)

本人が結婚生活やリーブスと共に暮らすことに対する不安をミックとミノウィッツとの会話の中で、語ったかどうかはここでは断定することは出来ない。しかし自身の性的なアイデンティティに葛藤を覚えていたミックが、ミノウィッツと関係を持つことで異性愛的な関係(=結婚)に引き寄せられ、より深いレベルで葛藤を感じている姿は、性交渉に不安を覚えながらもリーブスに強引に迫られたことで、結婚することになったカーソンの姿と重なり合う。カーソンとミックは共に、自らの性的なアイデンティティな揺らぎを男たち(リーブスとミノウィッツ)に理解されることなく、異性愛的な物語の中に引きずり込まれている。彼女たちは周りの人間たち、つまり男性や伝記作家によって、都合の良い姿に作り変えられ、語るための「言葉」を失ってしまったのではないだろうか。

3.3 シンガーとカーソンの結びつき

カーソンが異性愛的な関係を前提とした社会の中で抑圧され、自分の「言葉」を失ってしまったと考えるとき、彼女が『心は孤独な狩人』の前身である“The Mute”の構想を閃いた時のエピソードが違った形で見えてくる。

それにしても不思議な創作過程だったとカーソン自身認めています。始めは思いつくままに書き進め、登場人物たちが現れるままにページの中に納まっていきました。毎日書き進めてはいても物語全体としての意味あい欠缺していました。ところがある日、彼女が尾の思いにふけりながら、居間の手織りの絨毯のある模様の上を踏みある模様はまたぎながら歩いていた時——なぞめいた小説の形態に動揺しながら——突然大なるひらめきがおこったのです。興奮して彼女は母を呼び、ミノヴィッツは聾啞者で、名前はジョン・シンガーだと告げました。母はカーソンの宣言に当惑して、少し考えてからこう尋ねました。「一体何人の聾啞者を知っているというの？」

「一人も知らないけれど、でもシンガーのことは知ってるわ。」これが彼女の答えでした。(Carr 1976=1996:79)

彼女は聴覚障害を持つシンガーを物語に登場させることを突然閃いたのだという。当事者のことについて知識を持ち合わせていなかったが、彼女はシンガーのことについて「知って」いた。カーソンはシンガーと同じ障害を持ってはいないが、二人の間には共通点がある。二人とも社会的な抑圧によって、他者の都合の良い姿に作り変えられ、消費されることによって、自分の考えを語る事が出来ていない。あくまでも推測の意義を出ないが、カーソンは異性愛的な物語の中に押し込められることに不安を感じていたなかで、自分と同じように、他者に都合の良い姿に作り変えられ、自分の考えを誰にも伝えることが出来ない人物を描きたかったのではないだろうか。だからこそ、聴覚障害を持つ人間の事を知らないにも関わらず、シンガーを思いつくことが出来たのである。彼は耳が聞こえないことで、沈黙せざるを得ず、周囲の人間が自分の理想の話し相手を投影するのにはぴったりの人物であった。カーソン自身も周囲の人間による抑圧によって、シンガーと同じような感情を抱いていたのかもしれない。同じようにミックやコーブランド、ジェイク、そして他の作品に登場人物たちも身体的な特徴や社会的な抑圧によって、自分の考えを誰にも伝えることが出来ないために孤独に陥っている。そのような孤独は彼女自身もまた感じていたものであり、性別や人種など異なる登場人物たちが同じような孤独を抱える作品を書きあげることによって、幅広い読者に読み継がれるようになったのではないだろうか。

おわりに

本稿では、最初に『心は孤独な狩人』の登場人物が抱える「孤独」について分析した。彼らは身体的な特徴や社会的な抑圧によって、居場所を無くし、誰にも自分の考えを伝えることが出来ないために孤独に陥っていた。そんな彼らは聴覚障害を持つシンガーに自分の思いを語りかけることで、孤独によって空いた心の隙間を埋めていた。2章ではシンガーに対する町の住民たちによる「語りかける」行為の暴力性と、なぜシンガーが沈黙してしまったかについて、当時のアメリカ社会の手話を巡る状況と照らし合わせて分析した。最後にカーソン・マッカラーズ自身の生涯に焦点を当て、なぜ彼女の作品に障害を持つ人物や、社会に虐げられている人物が多く登場するのかを分析した。彼女もまた異性愛的な関係に違和感を覚えつつも、社会的な抑圧によって無理やりその価値観の中に押し込められ、葛藤をしていた。彼女もまた自分の言葉を持つことが出来ないために、「孤独」だったのである。

残された課題を整理するならば、彼女の他の作品においても本稿での「孤独」に関する分析が当てはまるのかという事を指摘したい。『心は孤独な狩人』は彼女のデビュー作であるために、他の作品を執筆する過程で「孤独」に対する考え方や人物の描き方に変化があることが考えられる。他作品との比較を通じてマッカラーズの「孤独」観の変遷を辿っていくことで、より包括的なマッカラーズ論になるはずである。執筆された当時のアメリカ社会におけるレズビアン運動に対する考察が不十分である点も課題である。

文学における障害者表象の研究は、これからますます増えていくだろう。本ゼミに所属し文学作品の批評をしたことで、発展段階にある障害者表象に関する論文を書くことが出来た。これは筆者にとっても大変貴重な経験だった。本稿の作成に当たってご指導いただいた早稲田大学文学学術院文化構想学部の岡部耕典教授、小野正嗣教授には感謝を申し上げたい。

参考文献

- *Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th edition*, Oxford University Press, 2010

- Bradshaw Charles, 1999, "Language and Responsibility: The Failure of Discourse in Carson McCullers' s "The Heart Is a Lonely Hunter" ", *Southern Quarterly Vol.37, issue 2*, The University of Southern Mississippi:118-123
<https://www.proquest.com/docview/1416165190?fromopenview=true&pq-origsite=gscholar&sourcetype=Scholarly%20Journals>.

- Baldanza, Frank, 1958, "Plato in Dixie" , *The Georgia Review Vol,12, No.2*, 151-167, the University of Georgia.

- Carr, Virginia Spencer, 1976, "The lonely hunter: a biography of Carson McCullers" , Anchor Press. (=1998 浅井明美訳『孤独な狩人 カーソン・マッカラーズ伝』国書刊行会.)

- Crawford, James, 2000, "At War with Diversity: US Language Policy in an Age of Anxiety" , *Multilingual Matters*.

- Fatimah Tobing, Rony, 1996, "The third eye: race, cinema, and ethnographic spectacle" , Duke University Press.

- McCullers, Carson, 1940, "The Heart Is a Lonely Hunter" , Penguin Books
(=2020 村上春樹訳, 『心は孤独な狩人』新潮社)

- McCullers, Carson, 1975, "The Mortgaged heart" , Penguin Books,

- Millichap, Joseph, 1971, "The realistic Structure of The heart Is a Lonely Hunter " , *Twentieth Century Literature Vol. 17 No.1*:11-17

- Sanchez, Rebecca, 2015, "Deafening Modernism Embodied language and visual poetics in American literature" , New York university Press.

- Shapland, Jenn, 2020, "My Autobiography of Carson McCullers" , Tin House.

- Steele Alexander, 2021, "Estrangement and the Consequences of Metaphorical Deafness Reconsidering The Heart Is a Lonely Hunter" , *Journal of Literary & Cultural Disability Studies 15.1*, Liverpool University Press.

- 伊藤泰子, 2011, 『マッカラーズとウエルティの作品中の聾者』愛知工業大学研究報告第46号57-64

- 村上春樹, 2020, 「訳者あとがき」『心は孤独な狩人』, 新潮社.